

令和 3 年

奥州市総合教育会議
会議録

第 2 回定例会 12 月 23 日開催

奥 州 市

1 開会、閉会等に関する事項

開催日時 開会 令和3年12月23日（木）午後3時30分

閉会 令和3年12月23日（木）午後5時00分

開催場所 奥州市市役所 本庁 7階 議会委員会室

2 出席者の職及び氏名

小 沢 昌 記 市 長

高 橋 勝 教育長

吉 田 政 教育委員（教育長職務代理者）

高 橋 キ エ 教育委員

及 川 憲太郎 教育委員

藤 田 登茂子 教育委員

3 説明のため出席した職員

（教育委員会事務局）

千葉昌教育部長、及川協一教育総務課長、佐藤克洋学校教育課長、菊池長学校教育課主幹、鈴木常義歴史遺産課長

事務職員出席者：小山和彦教育総務課長補佐

（協働まちづくり部）

浦川彰部長、佐々木靖郎生涯学習スポーツ課長

4 主要議題

奥州市の教育施策に関する意見交換

「地域の郷土芸能を活かした、地域愛の醸成について」

5 協議の概要

開会、市長・教育長挨拶、主要議題の協議

第1 開会

千葉教育部長が開会を宣言

以降の日程のうち第3までは千葉教育部長が進行、第4以降についてはテーマに従い小沢市長が座長となり議事を進行。

第2 市長挨拶

教育委員の皆様には日頃からお世話をいただき心から御礼を申し上げる。

江刺エリアの学校再編等やらなければならないことが目白押しですし、また、少子化における子どもたちの教育のあり方等については、本当に様々な形で機微な変化に対応できるような状況をとっていかなければならない。

もう一つは、ギガスクールに代表されるIT技術の習得に向けて、市としての考え方、教育委員会としての考え方などについて、明確に示すことによって、学校によって差異が出るようなことがないようにしていかなければならない。

教育委員会及び奥州市の果たす役割はますます、重要なものになってくると考えている。

本日のテーマは、「郷土芸能を活かした地域愛の醸成について」ということで、現状等を事務局から説明し、それに対して意見を頂戴する形で進めさせていただく。これまで、事務局も不慣れで、私が全ての委員に話を持っていくような形で進めたが、やはり本来あるべき姿でないと反省し、委員の方々がそれぞれ思うところを話し、何らかの形としていければと思う。

本日はよろしくお願いします。

第3 高橋教育長挨拶

日頃から市長を始めとして、市長部局のご理解とご協力により、本市の教育行政が着実に推進できていることに対し感謝を申し上げる。

当市の教育振興については、市長及び教育委員会が一層の連携を深めながら、共通認識や、課題解決の方向性を共有した具体的な取り組みが必要であると考えている。

本日のテーマである「地域の郷土芸能を活かした地域愛の醸成について」は、少子高齢化による担い手不足で地域コミュニティが衰退にあること、或いは、地域学習の一環として、学校教育が担っている役割についても、学校再編などが進むことにより、取り組みの継続が難しくなってきた現状があることから、学校と地域がどの様に受け皿を準備するかなど、対応について検討していく必要もあると思い、このテーマを取り上げさせていただいた。

地域に伝えられている伝統文化や伝統芸能を学び、地域に対する誇りと愛着を育てていくということは、大きな教育的な価値があると捉えており、本市の子どもたちの教育において、大変重要な内容であると捉えている。

このことから、本日のテーマである郷土芸能を切り口としたところであるが、それ以外にも様々な部分へ波及していることもあるかと思う。

学校教育において、どのようにして郷土愛を醸成していくかについて、様々な視点からご意見を頂戴できれば良いと思っている。

市が掲げている「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」の基本目標に、「地域愛の醸成と安心・安全に生活できる個性豊かな地域社会の実現」を推進すると掲げられているので、市と教育委員会が課題を共有し、協議調整することにより、具体的なアクション或いは取り組みに繋がることを期待している。

本日はよろしくお願いします。

第4 協議事項

テーマ「地域の郷土芸能を活かした、地域愛の醸成について」

現状説明として、教育委員会における取組の現状を千葉教育部長から説明を行った後、協働まちづくり部における取組の現状を浦川協働まちづくり部長から説明を行った。また、及川教育総務課長からテーマの背景やテーマに対する意見交換について、資料により説明を行った。

【協議】

吉田委員：私が校長として、白山小学校へ赴任した際、百姓踊りが３年生の学習発表会の演目となっていた。

担任は見守るが踊りは分からないため、引継ぎとして３年生から２年生へと子ども同士が見様見真似でしており、何年か経過すると本物はどの様なものなのか、本当の踊り方も分からなくなっていた。そのため、水沢農業高校から教わることにした。その結果、水沢農業高校がやっている本物に変わっていき、それが繰り返されるようになった。この要因は、地元にはリーダーがいなかったため、きちんとした形で伝わらなかった。

統合後には地域で行うということで、そのようなことも考えながら地域へ引き継いだ。

もう一つは、衣川小学校。私が赴任した時には前任者が衣装を準備していた。そして、赴任した年の運動会から発表してくれと言われた。しかし、衣川小学校の神楽の指導者は大森分校であり、地元にはいなかった。地元のようだが、意識も違うし、今までやったことのないことを本校でやることになり、大森分校のＯＢに来てもらい、教えてもらい、６年生が運動会の際に踊ることが続いている。このことを考えたとき、これまで続いているのは、衣里小学校の川西剣舞のように、いろいろな場所で発表しているのは、地元で世話をするリーダーがいるからだと思う。

大事なことは、地元で根差した郷土芸能というのは、地元のリーダーじゃないと駄目だと思う。やはり、地元のリーダーを教え育てることが大事だと思う。

今年の１０月頃にＮＨＫのテレビ番組（日曜日の８時ごろ）で、平泉町の達谷窟の神楽を一生懸命教えている３０代の女性がいた。その人は、自分も神楽を小学校のときに踊っていた。もともと祖父が神楽を復活させた人。本人は、大きくなったら一切触れたくないと東京へ就職した。そして、３０歳を過ぎてから家に戻ることにし、祖父が亡くなる。そのため、地域に教える人がいないので、調べるとともに、お母さんが昔踊った人ということで、テレビでは太鼓を叩いているが、踊りも含めて全部、自分しかいないということで一生懸命体得し、地域の子どもたちにその神楽を復活させた。

そのような活動が何年か後、平泉中学校の体育館を練習場所として数人が参加して始めた。結局、私は地域のリーダーというのは、そのようにやらなければならないというか、面白いというかもだし、使命感を感じながら、リーダーと指導者がいないと保存というか、残っていかないとテレビを見て感じた。

今、体得している指導者がいるうちに、次々と伝承していくことが大事。本日の資料にはないが、郷土芸能世話人研修会や交流会などを開催し、情報交換をする必要もあると思う。特に江刺地区だが統合により閉校してしまう。学校では、郷土芸能の発表の場として学習発表会や練習などの世話をしている。学校がなくなるということは、郷土芸能の伝承にとってマイナスである。

このことを学校再編の検討をする人たちに呼び掛け、課題とか予算的なこ

とを（振興会に出しているところもあるが）みんなで交流して行くという雰囲気の醸成が大事だと思う。そのための研修会や交流会を、毎年とは言わなくても行う必要があると思う、いずれ問題は、地域の少子化なので、呼び掛けや（やりたくない子どももいるが）小さいときからそのような雰囲気を作って活動することによって、大人になって、指導者やリーダーとしてやれる人を作らないと継承していくことができないと思う。

また、発表の場が正月明けにあるようだが、今までは地域の人も学校の発表会に来て、地域の子どもの発表を皆で見えていたと思うので、地域でそのような発表など、お祭りなど出来ればいいと思うが、ないところもあるので、発表の場があれば、意欲にもつながると思う。ただ踊って終わりとか覚えて終わりでは続いていけないので、発表していない団体に対し、どういふうに発表の場を与えるかということも大事だと思う。助成も大事だが発表の場をいかにして作るかということが、大きな意欲につながる、続いていく一つではないかと思う。そのようなことを感じている。

小沢市長：ありがとうございます。吉田委員におかれては、教員生活も長く、校長先生として意欲もある方なので、様々な形から発言があったが、統合して残せるかという部分は、よほど地域がしっかりしていないと無理だろうと、本当に思う。学校でやること自体が無理であり、地域でやるしかない。ただ、剣舞や神楽、大黒舞などあるが、何もなくなるとそれも寂しい気がする。御神楽だってあまり大切なものではないと思ってしまえばなんだが、無くなってしまい誰も神楽を踊れる人がいないというものもどうかと思う。

高橋委員：統廃合によって、これまで学校で出来ていた伝統芸能を継承していくことが難しくなっていると思った。また、市指定の無形民俗文化財が 74 件あっても、後継者不足で活動が停止されている団体も数多くあると思う。今の時代の流れに合った或いは、それぞれの地域の事情に合った無形民俗芸能の継承の仕方を工夫していく必要があると感じる。

一つは、学校が主体となって継続していくことは、難しいと思う。一方で、胆沢の前谷地神楽は地区振興会と学校が協力して神楽クラブをつくり、学校で教え、後継者育成にもつなげている取り組みもある。このよう形で学校独自では難しくても地域が一緒になって継承していくことに切り替えていかなければならないと感じた。

かつて、現在は閉校となった胆沢高校では、国指定の朴ノ木沢念仏剣舞を子どもたちに教えていた時期があった。その時に習った子どもが現在 30 代になり、3 人くらいが中心となり、担い手となって活動している。高校生だが、こうした幼少中の青少年の時期に、民俗芸能に触れることは、子どもたちの成長に大きな影響を与える。また、若い方たちを地元に結びつけるといった機会にも繋がると思う。

2 つ目は、先ほど吉田委員からも話されたが、やはり団体同士の連携を図る場がないかと思う。連絡協議会のようなものがあれば良いとも感じる。芸能祭りなどを行う時には実行委員会形式で行うが、その団体だけは顔合わせが出来ているが、活動が停滞している団体はその輪に入っていない状況。今、活動はできないが、いずれ後継者ができれば活動したいという団体もあ

るかもしれない。そのような団体同士で、うまく活動できている団体のノウハウを共有したり、情報交換をしたり、或いはリーダーの育成にも繋がるので、そうした情報交換ができる場、協議会などがあればいいと思う。

3つ目は、発表の場である。今、コロナ禍の中で、発表する場が少なくなっていると団体の方々も話しているが、やはり発表する場があると、活動している子どもたちにとって励みになる。達成感を体験することができ、大人もだが、モチベーションにも繋がる。発表することで当事者だけでなく、発表を見た子どもたちや大人にも郷土芸能を知ってもらう、興味を持ってもらう機会にもなるので、多くの方に見てもらうことで、理解して頂く、協力して頂くことも考えられるので、発表の場をより多く広めていくことも必要と感じた。

もう一つは、特に担い手の方たち、中でも若い方たちは、どうしても会社勤めしている人が多く、行事や発表の場があっても、会社を休んで出られない方もいる。できれば会社や事業所に対し、社員の方を快く参加していただけるよう依頼しても良いのではないかと。消防団などでは、団員の活動を事業所へ依頼しているところもあるので、そうした依頼があっても良いと思う。これには、本人の気持ちもあるので、難しいことではある。活発に活動している団体を見ると、地域とか男女の性別とかを問わず担い手の方を受け入れている。且つては、そこの地域だけとかそこの地域の家督の人だけということがあり、次男は活動できなかったという話も聞いたことがあるが、地域外の方でも市外の方でも女性の方でもウエルカムと話されていて、活発に活動している団体もある。やはり発表の場を出来るだけ多く作ろうと努力されている。その活動した状況を自ら広報を作り、更にいろいろな形でお知らせしている団体もある。本当に一生懸命で熱意のある人がいる団体が、その団体の活動状況を変わらせる、活動を活発にすると感じた。

数多くある保存団体すべてが、今後、活発に活動できるかというのは難しいので、残念ながら活動を休止せざるを得ない団体がこれからもあると思う。先ほど話した活発に活動している団体も、かつては活動を停滞していた時期もあった。熱心な方のおかげで、今活発に活動できるようになったというケースもあるので、いつかまた復活できるときのために、演舞といったものをきちんと教育委員会として保存していく必要があると思う。

少なくとも指定されている団体についてきちんと整理し、高齢化により保存がうまくいかない場合もあると思うが、整理し保存する必要があると思う。

いずれにしても、長い間、その地域において多くの方たちが継承してきた民俗芸能なので、是非、後世にも伝えられるようにして欲しいと思う。

小沢市長：ありがとうございます。無くすのは簡単だが、守るのは本当に大変だと思う。

藤田委員：郷土芸能を見たとき、江刺はやはり鹿踊りのイメージ強い。しかし、子どもたちは小学校で活動しても、中学校では活動しているところがない。そして、高校へ進学すると、岩谷堂高校で鹿踊り部というものがあり、女子高生も多く参加している。知り合いのお嬢さんも入っているので話を聞いてみた。

知名度をアップするため、広く県外でも公演を行っている。また、その公演の際には、たくさんの方に声掛けをし、鹿踊りを知って欲しいと思いながら活動している。

先日、県の総合教育文化祭があり、北上湘南の鬼剣舞が最優秀賞を取った。また、伊保内の神楽や岩泉の中野七頭舞という神楽の公演があった。中野七頭舞神楽は常連ということで調べてみた。

岩泉町の限られた小さい地区での伝統的な神楽で、保存会と地元の小中学校、岩泉高校の連携がうまくできている。東京の東京民族舞踊教育研究会の協力もあり、北海道、東北、関東、関西などに七頭舞神楽を踊るチームがあり、すごく普及している。これは、保存会の人たちが中心だが、岩泉という離れたところにあるので、子供会のメンバーがやるところに、興味のある方たちが講習会として練習し、それを持ち帰って各地で広げるとか、東京民族舞踊教育研究会を組織している方が、主に教員の方が多いということで、そのため、各学校で神楽を学校の行事として取り入れるということで、広まっていたという資料があり、すごい成功例だと思い読んでみた。

小学校で踊るのは高学年の5、6年生だが、その子どもたちも、他から来た人たちに対して教えている。自分たちが踊りをマスターしながらも初めて来た方たちに教えたり、教えることの難しさを知ったり、それから中学校の生徒もそうした機会を増やしていき、交流が深まったとのこと。

余談だが、少し前のラジオのオールナイトニッポンで星野源さんのコーナーで、岩泉の七頭舞神楽のことを取り上げたということもあり、本当に知人ぞ知るものになっていると感じた。

このような活動を一概に奥州市で、統廃合や少子化などの現状において、うまくあてはめられるかは、少し難しいと思うが、やはり興味があって、やりたいという人の受け入れを拒まずに、裾野を広げる、ハードルを下げる形で、絶やさない形で、進めて行くという方向性もあると感じた。

また、沖縄に友人がおり、沖縄の郷土芸能はエイサーだが、これは保存会があるというより、各地区の青年会が中心になって継承している。もちろん幼稚園から小中高と折に触れて、運動会などで演目としてエイサーをやっているので、子どもたちは小さい頃からなじんでいる。その曲が流れると、興味を持って、踊る方たちの躍動感やカッコよさを見ているので、自分たちがやることに對し何ら抵抗感がなく、エイサーを続けられる状況にあることを聞いた。

鹿踊りでは、様々な用具などの準備が大変で、踊っている方たちが高齢であったりすると、よくやって下さるという気持ちが強く、あこがれを持った目で見られるかということ、それは違ってくる場所も残念ながらあったりする。そこを若い方が参入することによって、小さい子どもたちが憧れを持った形で見ることであれば、自発的にやりたいと思う人が出てくるかもしれない。

また、2人の委員が話していたが、発表の場がどうしても欲しいと思う。直に、生で、演舞演奏を肌で感じる場所があった方がよい。コロナ禍の状況では難しいと思うが、是非、そうした機会を増やして頂くことが大切だな

と思っている。

小沢市長：ありがとうございます。

及川委員：よく伝統と伝承の違いを言われることがあるが、伝承とは、昔からあるものを、そのまま引き継いでいく考え方で、伝統とは、昔から引き継いだものをその時代に合わせて受け継いで伝えていくことだとすれば、規模や意味合いは異なるかもしれないが、私も火防祭において、横町組で小さい時から「トットコメイ」や「大太鼓」に出ている。大人になって運行にも携わる中で、やはり継続していくことの難しさをすごく感じており、どうして自分だけが 29 日の祝日に出ないと駄目なのかとか、見る側に回ってゆっくり遊びたいと思う気持ちもある中で、最後は、自分がこの町に生まれた宿命だと思いながらやっている。

やはり、その地域の中で、時代に合わせて変えていくことを恐れてはいけないと思う。火防祭においても、町内または年番の中でも毎年のように話し合い、昔は、お人形さんや三味線も町内の子供しか出てはいけなかったものが、少しずつ変わり、何年か前には A K B の人が搭乗するなど、変化している中で、大切なことは先代から続きたいまつとか、これまで続いたものをいかに受け継いで次に託していくことだと思うので、変化することを恐れないということが必要と思う。

やはり、郷土芸能に宿る思いとか、地域愛みたいなものは、きちんと伝承していくことが大事である。それは昔からそこにあったものなので、そのまま受け継いでいく必要があると思う。

今回の資料において、学校の統廃合後を見ると、無くなってしったり、1 個が残ったりなど、本来は全て残れば良いと思う。それぞれの郷土芸能には、優劣とか規模の大小とか関係なく、すべて並列だと思う。地域における愛着がそれぞれあるとともに、こだわりもあるので、統合先でのとりまとめは難しいと思う。統合先の校長先生、例えば前沢地区はその最終判断を委ねるとなっているが、これだと最終的に判断を預けられた方は、すごく苦しいと思うので、総合前にある程度の道筋を決めて頂く方が良いと感じた。

そうしなければ校長先生が大変。なお、道筋が決まったものに関しては、外野がとにかく言わない、その地域で決めたことだから、残るにしても残らないにしても、その意見を尊重するのが大事と思う。もし、残念ながら無くなってしまった場合には、やはり、高橋委員も話していたように、記録とか資料というのは、きちんと残す義務がある。それをやるのは教育委員会かと思う。もし、将来やりたいという人が出たときに、その資料を使う、又はきっかけとして、補助的にできることもあると思うので、ぜひ残ることを祈念したい。しかし、やはり続けていくのは大変だという現実にあると思う。

小沢市長：ありがとうございます。今、教育委員の皆様から様々なご意見が出ました。なかなか難しいテーマであると思いますが、まとめとして、高橋教育長からお願いします。

高橋教育長：まとめになるかどうか分からないが、まず地域学習というものは本当に学校教育の中で大事だと思っている。地域のことを子どもたちは意外と知らない。伝統的なものとか自然とか様々な産業とか。それら小学校の社会

科などで、取り上げることがある。

地域によっては、地域学習を一生懸命やっているところもあるが、その効果が絶大なのは教育現場である。体験的に郷土を学べるとか、縦割りの知り合いとか、上級生が下級生を教える仕組みがでるとかの波及効果もあり、教育効果が高い。また、様々な部分で地域を知るためには、良い素材であり、踊りを踊ることによって、将来、全員ではないが、興味関心が高くなった子たちが、やってみようかということにも、ある程度繋がっている部分があり、成長して中学高校と続けている子もいる。

衣川小学校に赴任した時の大森神楽では、用務員さんや高齢の方が教えてくれたが、育った子たちが、20代30代の青年になり、かなりの人数の後継者を育て、さらに、その子たちが学校に来て教えてくれるとか、その子ども達も踊るとか、両親が躍るとか、良いサイクルになり回っている。このようにうまく繋いでいくには、やはり若手が育っていかないと継続しない。

資料より統合の該当校での郷土芸能の取組み内容を見ると、ほとんどが学校連携として学校に依存しているところが多い。学校再編により何もしなければ壊滅してしまう可能性も高い。やはり、学校主体の取組みに限界がきている。そこからシフトしていく仕組みづくりが必要と思う。一方で、任せられても困る地域もあると思う。

学校がこれまで行っていない部分と相談しながら、発表の場も必要だし、横連携の組織も必要と思う。

こうしたところを、アイデアを出しながら組織を作り、必要であれば予算なども含め、うまくシフトできるように検討したい。

江刺の5小学校は、まだ1年あるので、しっかりと受け皿を作っていく必要があると思う。今の各学校の校長先生も、高い意識を持っており、学校では、5つ集まって1つにまとめるのは多分無理なので、それぞれの地区で、活動的な部分を残すなど、様々な検討をして頂いている。

学校から切り離してしまうと続かないと思うので、学校と連携できるような仕組みを作りつつやっていく必要があるということで、地区の振興会や市サイドの含め、協力・連携できる部分をひねり出す必要があると思う。

郷土芸能については、大事な活動で残さなければならないと思うが、市全体としての地域愛を育てるということは、学校教育の分野に負っているところがすごく大きいと思うので、是非、力を入れてやらせたいなと思っている。

例えばの話だが、そこまでやる必要があるかという、そこまでの素材があるかどうかもだが、平泉町では、「平泉学」というのを作り、それを小中学校で学ばせている。この取組みには、かなりの時間を要したと聞いているが、そのような素材があるから、作り易さはあるかもしれない。そこまでやる必要はないが、地元のことをよく知る活動は、やる必要があると思う。

このような活動は、今の学校教育に求められている総合的な学習になるので、探求的な学習が必要になっている。そうすると、様々な郷土のことを知る、探求的に学ぶというのは、本当に郷土を知る良い手段だと思う。

全国の例を調べてみると、埼玉県のある市では、市全体で、地元学のような取り組みを行っている。これは、小中学校だけではなく、高校も一緒にな

ってやっている取り組みで、市側の政策部門で予算化し、様々な援助をもらいながら進めているような例もあった。

そのような形になって、地域全体のまちづくりの観点、或いは郷土愛を育てて行くと、いろいろなものを学び、遠くに出ていく子たちが多くなるのはその通りだが、このような取組が奥州にあり、何かの機会があれば戻ってくるような郷土愛を、やはり小さいころから育てていかなければいけないと思う。

そのため、何らかのアクションができればいいと漠然と思うので、今後も手立てを考えて行きたいと思う。

小沢市長：教育長も含め、郷土芸能が無くていいという人はいない。私は吉田委員の発言がきっかけになると思う。オール奥州のような形で交流会や研修会を開くなど、課題、悩みを話すことができる場所を見つけ、そこからアイデアを見つけながら対応していくなど。その仕掛けづくりが必要だと思う。

教育委員会事務局が、郷土芸能を守るために何を仕掛けたら良いかを提案するべき。協働まちづくり部もかなり影響してくるところ。

統合学校のどこかでできるかなればそれも難しい。一方で、話の中で出た、例えば玉里の芸能だから玉里の人たちだけでいいというのではなく、面白いと思ったら隣の人たちが来ても別に構わない。鹿踊りなどは、何々流の何のところの踊りが好きだからと、そこに行って、踊りを覚えたいと人もいるわけである。

何かリズムのある神楽を踊ってみたいとなれば、その神楽が自分の生まれた地域ではないけれども、その神楽を覚えたいなど、いろいろを回ってみると、獅子頭を持って踊るような踊りも市内にはある。鬼剣舞もある。

胆沢では、立派な大黒舞があり、いいなと思う。そのようなこともあるので、学校に絡ませるのは難しいかもしれないが、地域と一体となってという話になると思う。

そのために、例えば成功しているところを、苦しいけど頑張っているところも含め、何かしてみないかと、何とかしてくれという地域の方々に、何回かお集まりいただき、できるところからやっていきたいと思いますとなれば、結果として、すぐにリーダーが、或いは指導者が、使命感を持ったそういう方が出るかもしれない。また、誰も分からなくなる前に、DVDに映像を残しておくということなども含め仕掛けていくことが必要だと思う。

教育委員会の委員の皆さんと教育長が発言しているので、事務局は応えなければいけない。どうすれば残せるのかを協働まちづくり部と連携しながら検討していく必要がある。

現在、コロナに対応するため、地区センターに大型映像ディスプレイの装置を設置しているので、地区センター間でのリモート会議などもできる。最初から実りのある会議はできなくとも、集まり顔合わせし、それぞれの地域間での情報交換も大事。

有形のソフト事業を何とか残していきたいということに対して、どういう仕掛けをすれば残せるかを、まさに行政として、教育委員会の力の見せどころじゃないかという気がする。

郷土芸能を主軸とした、交流会とか研修会とか或いは問題を考える会など、

別にそれが鹿踊りであっても神楽であっても、大黒舞であっても、とりあえず何とか継承していきたいと思いのある方が集まって、それぞれのやり方を出し合いながら、方向性を見つけ、主として、協働まちづくり部が手伝いできるところがどういうものか、教育委員会でお手伝いできるのはどういうものか、ということの中で、胆沢では、文化ホールを使い大きな出し物をしている。江刺も鹿踊りが中心だけどそういうふうなものをやっている。さらに、高齢者が中心になって見にくる。こうしたことを何とか頑張り、繋げてみることをしたら良いと思う。

まとめにならないが、ここにいる皆さんがぜひ何らかの知恵を寄せ、継承する方法を見出して行くべきだと発言しているので、事務局、我々は応えなければならないということだけはしっかり申しておきたいと思う。

この件については以上とさせていただきます。

第4 その他 なし

閉会